

第 61 話<村政永久史料>の要約と参考資料

第 61 話<村政永久史料>の要約

講元の佐藤竹松さんから勧められて元岩戸村長の甲斐徳次郎さんを訪ねました。「牛馬が倒れるので獣医に精密検査をやらせた。その調査書を保存した」と聞いて、高千穂町史編纂室へ。そこで見つけたのが、「村政永久史料」に綴られた池田牧然獣医の報告記でした。

第 61 話<村政永久史料>の参考資料

6 1 - 1 佐藤竹松さんの話（昭和 47 年 8 月聴取）

和合会は始まる前に必ずお経をあげた。和合会は「規約」で時間の励行、債権者が無理な利息をとりあげる場合は、中に立って弱い人を助けることなど決めていた。もし犯罪を犯した人がおれば、名誉を守るためにも外に出さず、内輪でおさめるようにした。また「結とり」といって、病人や死人が出て農作業の送れるところには、組から出合わせて手間助けをする。屋根普請、家の普請の加勢をしたりした。土呂久は畑中、惣見、南の三つの組に分かれていて、それぞれ組頭がいた。亜ヒ酸製造があるまでは、和合会はおおかたまとまっていたが、製造が始まってから利害の対立が起きて「喧嘩会」になり、最近、壊滅した。

6 1 - 2 佐藤竹松さんの人柄について

竹松さんの長男、佐藤正四さんの話（1982 年 8 月 25 日）

- ・ 甲斐徳次郎さんと同級生。
- ・ 村会議員になれといわれても、出らんかった。「目立つと風当たりが強い」ということで、かかわりあわざった。「相撲はとってから強いよりも、とらんとく強い方がいいっちゃ」と言うて。
- ・ 子どもが 12 人おったんです。上と下が 30 歳くらい離れとる。子どもの頭が学校卒業するまで借錢せんごつやっていけば、1 人卒業して働きだせば、あとはなんとかやっていける、という考えで。子宝部隊ちゅうて、戦時中に表彰受けたですが。戦時中は「機会は 3 年たてば、どういふものでもできる。人間な、20 年たたな使いもんにならん。子どもは持てるだけ持たな」ちいうて。どうでもこうでも子を造らな、血云うてやりよった。40～45 歳まで、持ちよったですが

竹松さんの孫、佐藤洋さんの話（2010 年 3 月 11 日聴取）

竹松じいやんは明治23年3月7日（和合会が創設された年）に生まれ、亡くなったのは昭和47年10月1日、84歳。（孫の洋さんは昭和17年8月生まれ）

竹松の父の惣蔵じいやんは昭和24年に亡くなった。読み書きができないのに、お経を読むことはできた。

竹松じいやんは、立宿（たちやどり）にあった学校に行った。土呂久から通うのは、（土呂久川右岸の道がなかったので）畑中の下を川縁におりて、石を伝って川を渡った。1年生のとき、橋を架けた。岩戸に尋常小学校ができたので通った。同級生に甲斐徳次郎さんがいた。2人で首席を争った。竹松じいやんが死んだとき、徳次郎さんが挽歌を書いた色紙をくれた。いま額に入れてなおしている。

「ありし日の 君の恵みのたたふ（讃え）らむ 今宵はしげき虫のこえごえ

竹馬の友 佐藤竹松君の長逝を悼み 謹みて挽歌を上（あぐ）る

（徳次郎さんの雅号 不明）合掌」

竹松じいやんは学校を出てから農業一本。徳次郎さんは東京の大学に進んだ。

（竹松さんが、教科書の草履づくりの挿し絵の間違いを指摘したことについて質問すると）違ったことをたださんといかん性分だった。

戦後、朝の5時ごろ物置に米泥棒がはいったことがあった。カギをあける音がしたので、それに気づいた竹松じいやんが泥棒を追いかけた。泥棒は、川にかかっている橋のところで、カルイの上に乗せていた米を落として逃げた。地元の人だとわかって、竹松じいやんはそれ以上の追跡をやめた。このことを聞きつけた巡査がやってきた。竹松じいやんは「うちは何もとられていない」と、泥棒をかばった。罪つくりになることを嫌って、村の和を守った。和合会の精神が竹松じいやんの頭にあった。講元や和合会会長をつとめたものとして、地元の人を罪に落としたのでは、村はうまくいかんというふうに思っていた。

煙害に対しては、三代士さんらといっしょに村や町の方と対立した。町は“鉾産税”が入ると言って、害を認めてはくれん。今のように、日本中から応援がくれば、役場も動かんといかんだっただろうが。鉾山がさかんになれば、働いている者は鉾山の側になって、和合会は「けんか会」の状態でまとめることができなかった。

（佐藤竹松さんが亡くなったときに、泉福寺の非宝さんが書いた色紙がある）

61-3 佐藤竹松さんと和合会役員

和合会議事録より作成

明治44年2月21日～大正11年2月19日	幹事
大正11年2月20日～昭和3年2月14日	副会長
昭和3年2月15日～昭和5年2月21日	会長
昭和5年2月22日～昭和8年5月24日	副会長
昭和8年5月25日～昭和11年旧正月23日	評議員

昭和 22 年 2 月 14 日～昭和 28 年旧正月 23 日 評議員

昭和 28 年旧正月 24 日～昭和 34 年 3 月 2 日 会長

6 1 - 4 文部大臣へ「御伺」

川原一之「土呂久雑感 修身教科書批判」（「辺境の石文」P114~115）より

「お上の誤りをただすたあ、ひと昔前なら打ち首ものでねえかの」

周囲の懸念をよそに、土呂久の佐藤竹松さんが文部大臣鳩山一郎閣下にあてて御伺を立てたのは、昭和 7 年のことである。尋常小学校二学年用修身の教科書のさし絵に「不審ノ儀有之」というのだ。

戦前の道德教育を受けた人なら、覚えもあろうか。この教科書の孝行の章は「オフサハ チヒサイ トキ カラ 子モリ ナド ニ ヤトワレテ、ウチ ノ クラシ ヲ タスケマシタ。(略) マタ チチ ガ ザウリ ヤ ワラヂ ヲ ツクル ソバ デ ワ ラ ヲ ウツテ テツダヒマシタ。……」とあって、子守や奉公に出て家を助ける孝行娘の手本が示してある。さし絵には、草履を編む父と、そのかたわらでワラを打つ娘の姿が描いてある。

草履づくりの名手だった竹松さんは、息子の教科書のこのさし絵に看過できない誤りを見つけ、文部大臣へ直訴に及んだ。竹松さんの没後 6 年たった今年の夏、そのときの御伺の下書きが発見された。

それによると、さし絵には次のような不審の個所があった。

第一に、草履を編むとき左手は下から上に向けるものだが、絵では逆手になっている。第二に、仰向きかげんに上体をそらしてワラをしめるのが正常で、絵のように背筋を伸ばしては腹に力が入らない。こうした姿勢では「到底仕事ハ不可能ニテ実務上甚ダ忌ムベキ恰好ニ御座候」。第三に、娘が打っているワラ束は古来より三か所くくるのが定法なのに、絵では一か所しかくくっていない。これでは、ワラの茎が「寸々ニ打チ切ラルルニ至ル」というのだ。その実証のために、竹松さん実演の写真も添付した。

当時、草履づくりは農家の重要な日課だった。「たかがさし絵」といって、誤りを見過ごすわけにいかない。いかに孝行に励もうとも、いいかげんな作法を覚えられたのでは、親としても迷惑だ。(略)

昭和 9 年の修身教科書改訂のとき、問題のさし絵は別の絵に取り替えられた。筋の通った竹松さんの主張が、文部省を動かしたようである。お上の誤りを許さない土呂久の民の心意気は、その後も竹松さんらを中心とする鉅毒反対の闘いに、伝統として貫かれていった。

6 1 - 5 甲斐徳次郎さんの経歴

高千穂町史 P336~337 より

岩戸村長

第 12 代~17 代 甲斐徳次郎 大正 13 年 3 月 14 日~昭和 21 年 11 月 7 日

第 20 代 甲斐徳次郎 昭和 30 年 4 月 8 日~昭和 31 年 9 月 30 日

甲斐徳次郎 生年月日 明治 23 年 9 月 5 日

高千穂町史 第 14 編人物 15. 甲斐徳次郎

甲斐徳次郎は高千穂町大字岩戸野方野に生まれた。日本大学で社会科、明治大学で自治科を学び、大正 13 年（1924 年）から岩戸村長を連続 6 回、通算 25 年 5 か月勤め、又昭和 6 年（1931 年）より同 21 年（1946 年）まで、県会議員に連続 15 年間勤めた。そして昭和 36 年以来、高千穂碑建立運動 1 本にすべてを打ち込み、佐々木信綱博士ほか 70 余名を発起人に、同碑建設協賛会を組織し、自信は常任理事の位置にあつて、募財を続け、昭和 41 年 11 月、名誉総裁高松宮殿下の臨場を仰いで除幕式を挙げた。建碑は、日本の歴史が神話時代にはじまることにかんがみ、「国の歩みの元標」にするために計画されたもので「新しい時代の新しい愛国心」涵養を目的とするという。（略）

徳次郎が昭和 39 年の御歌会始めに詠進した。

杉植ゑて葉守の四手と山口の

ひととの秀ヒトに白紙をゆふ

の心がいつまでも理解できる教育が切に望まれる。

6 1 - 6 池田牧然報告記発見の経緯

川原一之「斃牛」（「怨民の復権」Ⅱ P53~P70 より）

甲斐徳次郎さんは隠居の身だった。

岩戸から南へ 3 キロ、野方野という部落の、ぐるりに築地をめぐらす旧家に住んでいた。大正 13 年からと昭和 21 年までと、高千穂町に合併する直前の昭和 30 年から 31 年にかけて、通算 20 数年間岩戸村長の地位にあつた甲斐さんは、岩戸随一の長老であり識者である。

ストーブで暖をとる部屋は、祖母山吹きおろしの風の騒ぎをよそに穏やかだ。明治 23 年に生まれ、80 歳を越えた高齢とは思えぬほど、甲斐さんの記憶は鮮明だった。昭和 29 年、土呂久鉦山でしばらく中断していた亜ヒ焼きが再開され、焙焼炉近くにシイタケを植えて被害状況を調査した、と語り始めた甲斐さんの思い出は、しだいに古い時代へとさかのぼっていった。大正の終り、30 歳代の若さで、初めて村長に就任した当時のことである。

「わたしは第三者の立場というよりか、畜産組合に関係していたことから、土呂久鉦山の近所の牛馬がバタバタ倒れるので、精密な検査をやらせたことがある」

土呂久鉋毒で牛馬に被害があった、と聞いてはいたが、精密検査をした、とは初めて耳にする話だ。どんな検査だったのか。

「鈴木君と池田君という獣医が調べた。その調査書は岩戸村政重要書類として保存したので、もし岩戸支所に残っておれば、見せてもらってもかまわん」

思いもかけぬ重大な事実が飛び出した。鉋毒による牛馬被害を調べた文書を役場が保存している、というのである。早々に甲斐家を辞して、高千穂町岩戸支所へ車を走らせた。支所の職員の返事は素気なかった。

「そんな資料は見たこともない。最近、書庫がいっぱいになったので、岩戸村時代の書類はほとんど焼いた。もう残っとらんだらう。ひょっとしたら、高千穂町史作成の資料として、町史編纂室にあるかもしれんが……」

(略) 町役場でも同じように、職員の冷ややかな態度に接したとき、気負いたったあとの虚しさに襲われた。半ば諦めながらも、郷土史に造詣の深い助役の「町史のことなら、担当の郷土史家が詳しかろう」という言葉に促され、ぼくはその人を訪ねた。「書類をひっくり返してあげよう」と励まされ、同行して役場へ戻ったとき、10 数平方メートルの狭い町史編纂室内で、立ったままの助役が古い 1 冊の書類綴に目を通していた。真剣な眼差にひき込まれ、覗き見た文書に、まぎれもなく「土呂久重砒酸鉋山」の文字があった。

甲斐元村長の記憶は正確だった。「村政永久史料」としてまとめられたぶ厚い書類綴に、池田牧然の署名入りの「岩戸村土呂久放牧場及土呂久重砒酸鉋山ヲ見テ」という報告記と、鈴木日恵の手になる牛の「死体解剖書」がとじてあった。

大正 14 年に書かれた 2 種類の記録は、半世紀の厚いほこりを払って、昭和 47 年 1 月 19 日鮮かに甦ったのである。(略)

ぼくは甲斐徳次郎さんを再訪した。

視察報告記と解剖書には、まるで草稿のように何か所も書き直しがあり、解剖書は執刀者の名前も印もない。村役場に永久史料として保存されたにしては、公式文書の形式が整っていないのだ。その点を確認してみた。隠居してなお、20 数年間村長の地位にあった威風は衰えず、重要なくだりを話すとき、優しい眼差にキラリと鋭い光が走る。

「永久史料というのは、私的なものだよ。執務上の決まりはなく、のちのちの参考になると思ってわたしが保存した、私的な綴だよ」

そういえば、あの文書綴の表紙は墨で、中央に「村政永久史料」、左下に「村長」とあって、公式文書の綴とはどこか趣きが異なっていた。甲斐村長は将来必要になることを予測して、獣医から下書きをもらい受け、私的な文書綴にとじ込んだのである。行政に携わる者の熱意であろうか。その見識に、頭が下がる。この綴には他に、水争いや土地の境界争いの資料なども保存してあった。

私的に保存された下書きが、半世紀ののち、鉋毒を生きながらえた患者の証言を裏付ける、きわめて重要な記録として甦った。

一方、宮崎県に提出した公式の死体解剖書と斃牛の内臓が、その後どのように扱われた

か、なに一つ残された資料はない。